



# かけぬいっかし通信

～仲間とともに伸びる子 主体的に学ぶ子 いのち・人権を大切にする子～

<今月の巻頭言>

校長 松宮 孝明

「子どもの正面と横顔と背中、いくつもの姿・・・

～子ども本人には見えないものをずっと見守り続けよう!～」

運動会への声援ありがとうございました。今年は例年とは違う形となりましたが、感動の運動会になったと思います。これもひとえに、保護者の皆様や学区の皆様のおかげと感謝しています。子どもたちは、こうやって与えられた機会を乗り越えて、育っていくんだなと感じます。これからの2学期3学期も、子どもたち一人ひとり、自分に自信を持って大きく活躍してほしいものです。

さて、以前、国際日本文化研究センターに関わっておられ、今は、京都市立芸術大学名誉教授の鷲田清一という方の文章で、考えさせられたことがありました。

大学の卒業演奏会で客席からではなく、舞台袖で聴く機会があったそうです。そうしたら、堂々と演奏している正面の姿ではなく、「ものすごく、緊張した姿」「出演前に、瞑想するかのように行ったり来たりする姿」「ドレス姿なのに相撲さんのように蹲踞のような格好で屈伸を始める姿」「ストレッチやジャンプを繰り返す姿」「誰かにけんかを売るように手首をならす姿」「楽譜を愛おしそうに胸に抱くだけの姿」など、正面からでは見られない姿がいくつも見られたそうです。

また、それらを通して、昨日までの学生の顔にも思いをはせたそうです。「大学や家でひたすら練習してきたであろう顔」「友だちと切磋琢磨していく顔」「落ち込んで上を向けない顔」「自分も知らない内なる何かに突き上げられて放心している顔」・・・一人の学生にも、顔が何枚もあるとおっしゃいます。

そして、その何枚もの顔を、大学の教員は、じかに見て、時に思いやって、時に突き放してきたのだろう。実技の教員は、マラソン選手に伴走するコーチのようなもので、いつも学生の表情のみならず、横顔と背中という、本人には見えないものをじっと見守り続けてきたのだろう・・・と。

この文章を読んで、小学校の教師にも、家庭で見守る保護者にも通じるところがあるなと思いました。

つまり、私たちも、子どもをつぶさに見とり（あえて、看とりと書くときがあります。看護のようなあたたかさ、ていねいさで見るという気持ちを込めて。）、ていねいに対応していますが、時折、正面からしか見ていない、正面からしかぶつかり合っていないときがありはしないかということです。

時には、横顔からこの子の頑張りを認め、時には背中からつらい思いを感じ取ってそっと押してやり、そして、時には正面から正々堂々と、ひと対ひととしてぶつかってやる。そんな、いろいろな関わりをしていくことが大切なんだなあと思いました。

## 保護者の皆様のご理解ご協力に感謝しています！

今年度の運動会は、新型コロナウイルス感染症対策として、例年とは違った方法で実施しました。特に3密を避けるため、全体を2部で構成したり、種目数を減らしたりしたこともあり、運動会を楽しみにしていた子どもたちだけでなく、ご家庭の皆様にもたいへんご負担をおかけし、心苦しく思っております。

テントの設営や撤収では、PTA 役員の皆様をはじめ多くの保護者の皆様にお力を貸していただき、短時間で作業を終えることができました。事情をご理解のうえ、全面的にご協力いただいたことに心より感謝しております。本当にありがとうございました。



## 笠縫東小：こころの教育コーナー

短所を長所に変えて自信を持つ

「弱点は、強みに変えられる！」

アドラーは本の中で、「視力が弱い人が、それを弱点とせず、そのおかげでほかの人より想像力を働かせて、いい詩を書くことができた。」というエピソードを語っているんだ。

物事は、弱点だと思っていたことが強みにもなるんだ。たとえば、やるが遅い人は「ていねいな人」と言えるんじゃないかな。失敗が多い人は「たくさんチャレンジしている人」だよ。こんなふうに言い換えてみると、弱点や欠点が減って、強みがどんどん増えてくるよ。君の弱点は何か？ 思いつくことがあったら、それを強みに言い換えてみよう。

（「超訳 こどもアドラーの言葉」 齋藤 孝 著より）